

# 「ありがとう」の言葉の力

馬渡 徳子

今から丁度 27 年前、三人目出産と同時に定年を迎えた義父母との二世帯同居が決まった。大分出身の義父母と山口出身の私とでは、実際に暮らすとお互いに様々な葛藤があった。思ったことを何でも口にして、腹の中に何も持たない義父母と、プライベートでは(笑)グッと言葉を飲み込んでしまう私は、実に対照的で、三年間に三度も胃十二指腸潰瘍をつくった。一方で、さぞや義父母側は、嫁に思ったことを素直に表出してもらえず、はがゆい思いをされていたに違いなかった。

そんな時だった。私が担当させて頂いている「リウマチ患者会」にて、グループワークをしている時に、最年長の普段言葉の表出が少ない患者さんが、私にこう言われた。「あなたの『すみません』が、とても気になるわ。言われたこちらが、逆に申し訳ない気持ちになってくる。その言葉は、『ありがとう』に置き換えた方が、相手は気持ちいいと思うよ。」

ハッとした。出張の多い私たち夫婦は、同居してからも義父母に留守を頼むことが多く、いつも「すみません」を連発していた。すると、「遠慮しないで。子育てを応援するために同居したのだから。大丈夫だから、任せて。」と返答されていた。

従って、その直後から、「ありがとうございます。助かります。」の言葉に置き換えるようにした。すると、「うんうん。ありがとうって、本当に気持ちいいね。」と返答されるようになった。

「ありがとう」は、双方の存在を承認し、労い合うことのできる力をもっている言葉だと思う。

今年、金沢市教育委員会の季刊誌の夏秋号にコラムを連載している。15 年前から、毎年秋に、小学校の就学時検診時に子育てミニ講座と、小中高校の人権講話に、お招き頂いていて、今回のコラムにつながった。そのご縁の

きっかをつくって下さったのが、元教職員の先程のリウマチ患者さんだった。

「私は、おそらくこの病気にならないと、ソーシャルワーカーという仕事を生涯知らないでいた。社会貢献のできる素晴らしい仕事だと思う。様々な場面で、ソーシャルワーカーという仕事を後世に伝えていかないとね。それが、あなた世代の役割だと思うよ。小学校の保護者や、直接子どもたちに語ることでできる機会に、あなたを推薦するから、一つ一つの機会を大切に下さい。そして、出逢った人々の明日を生きる力のヒントになれば、と願っています。」と、後押し下さったのだ。

最初から恒例にしているのが、お招き先の状況に合わせて、始めに団士郎さんの「家族の練習問題」を朗読すること。団さんにお断りして、紙芝居にもした。五年前からは、対人援助マガジンの常連である水野スウさんの「ほめ言葉のシャワー」を使ってジョイニングをしたり、「憲法 13 条のうた-ほかの誰とも」をアカペラで歌っている。

ご紹介した本と CD は、学校や保育園の図書室に寄贈するという「しかけ」をしてきた。

ですから、「あの時の学生です。」と何年も経ってから、医療福祉系の実習生として再会したり、保護者が相談に来られたり、保護者や教員が、「いしかわ家族面接を学ぶ会」の仲間になったりと、未来につながっていくという楽しみもあった。

今春、私は、金沢大学大学院に社会人枠で進学した。私を、ソーシャルワーカーとして 36 年間育てて下さったリウマチ患者会の皆さんに、四年をかけて、質的調査研究を通して、求められる社会保障制度について政策提起ができるように、真摯に研究したいと考えてる。

修士論文が完成したら、リウマチ患者さんの墓前に、「ありがとうございました。先生の教えて下さった『ありがとうございました』の言葉の力を、定年後のこれからも大切に生きていきます。」と、ご報告に上がりたいと思う。